

システム開発・保守QCDS研究会2024

2025年4月10日

一般社団法人 日本情報システム・ユーザー協会
システム開発・保守QCDS研究会

目次

1. 研究会の取り組み
2. 研究会参加企業、参加者
3. 2024年度の取り組み
 - (1) 定例会の進め方
 - (2) 研究会で大切にしていること
 - (3) 2024年度事前アンケート
 - (4) 2024年度事例紹介
 - (5) 2024年度紹介事例・一例紹介
 - (6) 2024年度紹介事例・「S」の紹介
4. 2024年度も沼津合宿を開催しました
5. 2024年度 活動まとめ
6. 2025年度の取り組みについて

1. 研究会の取り組み

1. 研究会の取り組み

各社の事例発表、及びディスカッションを通して研究会メンバー、各社のレベルアップを図ります。

1. 各社事例発表・共有

⇒ システム開発・保守における品質・コスト・工期の改善及び生産性向上にむけた取組みについて各社事例を発表。
(自社内への展開含め改善のための事例共有)

2. テーマ別ディスカッション

⇒ テーマ別にディスカッションし、課題解決のアイデア、知見の共有に取り組む。(Give & Takeが前提)

2. 研究会参加企業、参加者

2. 研究会参加企業、参加者

| NO | 役割 | 会社名 | 氏名 |
|----|------|-----------------|----|
| 1 | 部会長 | 東京海上日動システムズ株式会社 | 東山 |
| 2 | 副部会長 | 株式会社ジャステック | 鈴木 |
| 3 | 副部会長 | カシオ計算機株式会社 | 森川 |
| 4 | 副部会長 | ANAシステムズ株式会社 | 岩谷 |
| - | 事務局 | JUAS | 橋本 |

2. 研究会参加企業、参加者

| NO | 会社名 | NO | 会社名 |
|----|---------------------|----|------------------------|
| 5 | 株式会社 I H I | 15 | S O M P O ひまわり生命保険株式会社 |
| 6 | 株式会社アバント | 16 | 株式会社大同 I T ソリューションズ |
| 7 | コープ情報システム株式会社 | 17 | 株式会社大和総研インフォメーションシステムズ |
| 8 | コベルコシステム株式会社 | 18 | 株式会社テプコシステムズ |
| 9 | サントリーシステムテクノロジー株式会社 | 19 | 東芝インフォメーションシステムズ株式会社 |
| 10 | J F E システムズ株式会社 | 20 | ニッセイ情報テクノロジー株式会社 |
| 11 | 株式会社 J P X 総研 | 21 | 日本ハムシステムソリューションズ株式会社 |
| 12 | 株式会社ジェーシービー | 22 | 日本航空株式会社 |
| 13 | ストラクチュアルライン株式会社 | 23 | 日本電気株式会社 |
| 14 | スミセイ情報システム株式会社 | 24 | 株式会社パソナ |

24社（団体）26名（除く J U A S）の方が参加

3. 2024年度の取り組み ～各社の事例発表・共有の成果報告～



3. 2024年度の取り組み

(1) 定例会の進め方

取り組み事例を紹介し、質疑応答も積極的に行われ、研究会メンバー各社のレベルアップに繋がっています。

- 開催日時
 - ・ 毎月第1火曜日 14時30分～18時00分 で全10回開催
- 1回の発表数
 - ・ 3～4テーマ
- 発表・質疑時間
 - ・ 発表：約30分
 - ・ 質疑応答（意見交換）：約5分
- グループ・ディスカッション
 - ・ 約50分
 - ・ 参加者の発表終了後、テーマごとに分かれてディスカッション

3. 2024年度の取り組み

(1) 定例会の進め方

事例紹介テーマについて、従来の品質・コスト・納期の維持向上テーマに加えて「S」を追加

QCDsに関連するテーマ

例：プロジェクト事例紹介(成功/失敗)、全社レベルの品質改善/生産性向上、メトリクス活用事例、人材育成、上流工程改善(要件定義の品質評価)等

QCD「s」の一例。 下記に限らず様々な視点で議論

Scope (スコープ)、 Slim (スリム)、 Speed (スピード)、 Spirit/soul (精神・魂)、 Sustainable (持続可能)、 Stable operation of mind (心の安定稼働) 等

3. 2024年度の取り組み

(2) 研究会で大切にしていること

有意義な場とするために

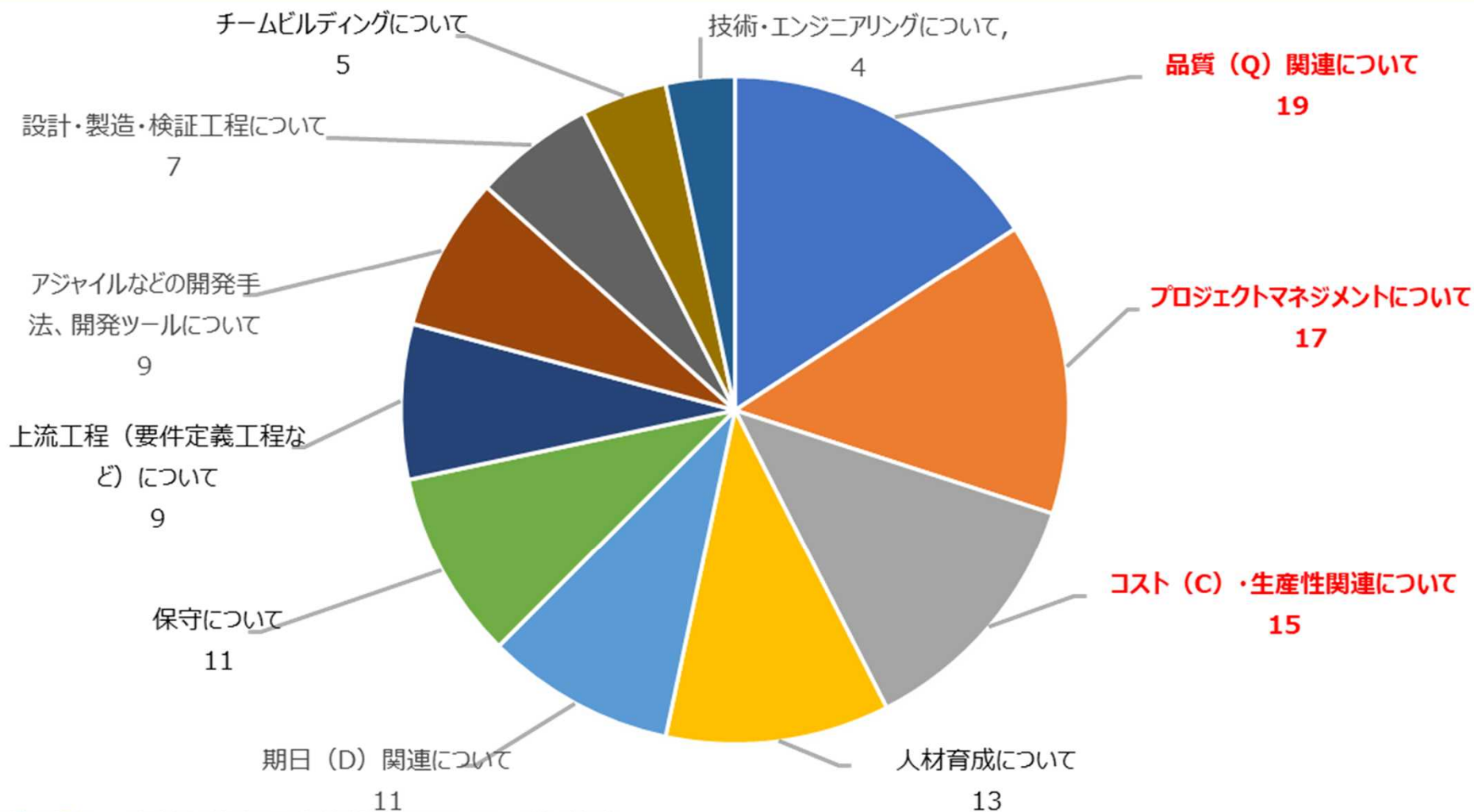
- Give & Takeを前提に各社メンバーが年1回事例を発表
- 発表に対しての質疑・意見交換
 - ・ 発表者への質問から研究会メンバー間の意見交換へ
- 発表内容は可能な限り具体的内容で
 - ・ 公開できる範囲内で、より具体的内容であること
 - ・ 発表者自身が関与し改善に取り組まれた内容であること
- 事後アンケートの入力
 - ・ 各発表後にアンケートを入力
 - ・ **2024年度はアンケート回答率が100%！全員のコメントを発表者にフィードバックすることができた。**

3. 2024年度の取り組み

(3) 2024年度事前アンケート

事前アンケートをとり、聞きたいテーマや課題認識を収集し、事例紹介のINPUTに。

1位:品質、2位:プロジェクトマネジメント、3位:コスト、4位:人材育成、5位:期日



3. 2024年度の取り組み

(4) 2024年度紹介事例

| No. | タイトル | 品質 (Q) | 保守 | マネジメント | コスト (C) | 人材育成 | 開発手法 | アジャイル等 | (要件定義等) 上流工程 | 期日 (D) |
|-------------|----------------------------------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------------|--------|
| 合計件数 | | 17 | 11 | 8 | 6 | 5 | 4 | 4 | 3 | |
| 1 | 品質向上の取り組みと環境変化に伴う対応 | ● | | | | | ● | | | |
| 2 | プロジェクト増加に伴う人材不足に対する取り組み | | | ● | | ● | | | | |
| 3 | メインフレームリスクと資源削減の取り組み | ● | | | ● | | | | ● | |
| 4 | QCD管理から、QCDSマネジメントへ | | | | | | | ● | | |
| 5 | インターネット共同基盤と品質管理について | ● | ● | | | | | | | |
| 6 | 品質改善の取り組みについて | ● | ● | | | | | | | |
| 7 | システム運用における保守ベンダーと課題 | | ● | | | | | | | |
| 8 | 事業部間にまたがるシステム開発について | ● | ● | ● | ● | | | | | |
| 9 | 派生開発での品質改善 | | ● | | | | ● | | | |
| 10 | ユーザ企業・ユーザ部門で事業貢献を実現するIT組織の検討 | ● | | ● | ● | | ● | | | |
| 11 | プロジェクトにおけるQCD管理と柔軟性 | ● | ● | ● | ● | | | | | |
| 12 | 品質確保と人材育成の取り組み | ● | | | | ● | | | | |
| 13 | リスク統制活動の紹介/作業障害に対する取り組み・検討内容について | ● | ● | | ● | | | | ● | |
| 14 | 当社取り組みについて | ● | | | ● | | | | ● | |
| 15 | オフショアを活用したシステム開発・保守とQCDSの事例紹介 | ● | ● | ● | | | | | | |

3. 2024年度の取り組み

(4) 2024年度紹介事例

| No. | タイトル | 品質 (Q) | 保守 | プロジェクトマネジメント | コスト (C) | 人材育成 | 開発手法 アジャイル等 | 上流工程 (要件定義等) | 期日 (D) |
|-------------|------------------------------|-----------|-----------|--------------|----------|----------|----------------|-----------------|----------|
| 合計件数 | | 17 | 11 | 8 | 6 | 5 | 4 | 4 | 3 |
| 16 | 品質管理と新たな取り組み | ● | | | | ● | | ● | |
| 17 | 保守開発における人材育成について | | ● | | | ● | | | |
| 18 | プロジェクト品質と「スコープ」について | ● | | | | | | ● | |
| 19 | システム保守の引継ぎにおける当社の取り組み | | ● | ● | | | | | |
| 20 | プロジェクト運営ナレッジの展開 | | | | | ● | | | |
| 21 | 初めての大型システム開発プロジェクトでの失敗談とリベンジ | ● | ● | | | | | | |
| 22 | システム開発の事例紹介 | | | | | | ● | ● | |
| 23 | QMS証跡管理システムの構築と活用状況 | ● | | | | | | | |
| 24 | 外部ベンダー協業強化の取り組み | ● | | ● | | | | | |
| 25 | 大規模PJ における品質活動の振り返り | ● | | ● | | | | | |

事前アンケートで上位となった品質、プロジェクトマネジメントに関連するテーマ紹介が多い。また、保守に関連するテーマ紹介が2番目に多く、保守開発に携わっている参加者が多かったことも影響している。

(5) 2024年度紹介事例・一例紹介

テーマ

オフショアを活用したシステム開発・保守と QCDS の事例紹介

<概要、背景>

- ・システム開発プロジェクトや保守運用プロジェクトにおいて、オフショアを活用する際に最も考慮すべきポイントは、オフショアを活用して何をしたいか、戦略 = STRATEGY を立てることであると考える。

<考察>

- ・以下6事例をもとにQCDのメリデメを整理し、戦略STRATEGYについて分析・考察。

事例①：グローバル 保守運用プロジェクト

事例②：導入プロジェクト

事例③：グローバル導入プロジェクト/保守運用プロジェクト

事例④：グローバル導入プロジェクト

事例⑤：タイ・シンガポール拠点 導入プロジェクト

事例⑥：販売物流システム再構築プロジェクト/インド拠点導入プロジェクト

3. 2024年度の取り組み

(5) 2024年度紹介事例・一例紹介

<発表スライド例>

Agenda

- はじめに
 - 会社紹介
 - 自己紹介
- オフショア活用における“S”とは
- プロジェクト事例
 - 事例①：グローバル SAP保守運用プロジェクト
 - 事例②：PLM導入プロジェクト
 - 事例③：グローバル SAP導入プロジェクト/SAP保守運用プロジェクト
 - 事例④：グローバル SAP導入プロジェクト
 - 事例⑤：タイ・シンガポール拠点 SAP導入プロジェクト
 - 事例⑥：販売物流システム再構築プロジェクト / インド拠点 ERP導入プロジェクト
- まとめ

2. オフショア活用における“S”とは (1/3)

システム開発プロジェクトや保守運用プロジェクトにおいて、オフショアを活用する際に最も考慮すべきポイントは、オフショアを活用して何をしたいか **戦略 = Strategy** を立てることである、と森川は考えます。

例えば、『オフショアを使ってコストを削減したい』や『オフショアの無限のリソースを確保したい』と思ってオフショアを利用としても、現実的には、

当初の計画：オフショアを使ってコストを削減したい！

- 実状：オフショア分のコストは削減できてきた。ただ、オフショアの品質が悪く、日本側で想定外のレビュー工数がかかる。
- 結果：オフショアを使わずに日本の開発者をアサインしていた方が、トータルコストは抑えられた。

であったり、

当初の計画：開発フェーズではオフショアのリソースを最大限にアサインして開発期間を短縮化したい！

- 実状：リソースは想定通り確保できた。ただ、マネジメントが困難で、品質低下・遅延に気がきにくく、責任の所在も不明瞭。
- 結果：適切なリソースのアサインだけが、効率的に推進できてスケジュール遅延を回避できた。

といったことが起こります。

このような状況に陥らないためにも、**オフショアをどのように活用するかという戦略** を明確にしておく必要があると考えます。

3-6. 事例⑥：販売物流システム再構築プロジェクト / インド拠点 ERP導入プロジェクト (6/6)

| | Quality | Cost | Delivery |
|-----------------|---|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ✓【再構築】バグ修正時に決定的に影響分析が足りていないため、結果的にバグが全く終息できない。(別のバグもしくはデグレのオンパレード) ✓【再構築】バグ終息に日本側のサポートの工数がかかるため、社内リソースの最適化には程遠い状態。 ✓【導入】インド固有要件の理解不足。 | <ul style="list-style-type: none"> ✓【再構築/導入】オフショア側の品質を日本側でカバーする必要があったため、日本側の工数増加につながり、コストメリットがなかった。 | <ul style="list-style-type: none"> ✓【再構築】バグ修正時に決定的に影響分析が足りていないため、結果的にバグが全く終息できず遅延が常態化。 ✓【再構築/導入】オフショア側の品質を日本側でカバーする必要があったため、日本側の工数増加につながり、結果的にスケジュールの遅延に繋がった。 ✓【導入】導入メソッドがない。 |
| Lessons Learned | GOOD Points | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 前ページのとおり、オフショアベンダ側が期待している体制・役割分担と、我々のオフショア要員に対する要望にギャップがあり、埋まりそうにないことが分かった。 ✓ 日本の技術者はコストは倍でもパフォーマンスが倍以上なので、結果的にオフショアよりコストが良い。 | |
| | BAD Points | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 結局ベンダとの契約は複数年続いたが、オフショア側のコストと、オフショアのフォローにかかった日本側メンバのコストを考えると、日本のベンダの経験豊富な開発者をアサインした方が結果的にコストが安かったと思われる。 | |

4-2. 戦略とターゲットに対する評価と分析 (1/3) - 当初の戦略ターゲット

| 事例 | オフショア国 | オフショア活用の主な戦略 Strategy | | | | | |
|--------------------------------|--------|-----------------------|--------|------|------|-------|-------------|
| | | コスト削減 | リソース確保 | 専門知識 | 現地知識 | 本社最適化 | 再掲 社内的制約 |
| 事例① グローバル SAP保守 | | 🎯 | — | — | — | 🎯 | — |
| 事例② PLM導入 | | — | 🎯 | 🎯 | — | — | 🎯 |
| 事例③ グローバル SAP導入/保守 | | 🎯 | 🎯 | — | 🎯 | — | 🎯 |
| 事例④ グローバル SAP導入 | | 🎯 | 🎯 | 🎯 | — | — | 🎯 |
| 事例⑤ TH/SG SAP導入 | | — | 🎯 | 🎯 | 🎯 | — | 🎯 |
| 事例⑥ 販売物流システム再構築 インドERP導入 | | 🎯 | — | 🎯 | 🎯 | 🎯 | — |

3. 2024年度の取り組み

(6) 2024年度紹介事例・「S」の紹介

2024年度を通じて、様々なSの視点で議論

一例を紹介

| | |
|-----------------------------------|---|
| Scope スコープ | 時間（スケジュール）とリソース（コスト）を固定化し、スコープを変数として、QCDをマネジメント |
| Slimming スリム化 | ITコストも増え続ける状況に対して、現行システムの不要資源を調査&事前に廃止し、スリム化する取組みが重要。 |
| Sustainability サステナビリティ | システムは初期構築後は必ず保守が発生する。システムを持続をさせることは、業務を持続させることに繋がる。 |
| Systematically システムティック | 過去の経験・事例に照らし合わせたベンチマークでPRJを可視化して品質活動に取り組む |

QCDに「S」を付けることで、視点が広がり、新しい発見につながる。

- ・ QCDを達成するためには「S」の視点が必要 → Scope、Systematically…
- ・ QCDだけでなく「S」の視点も達成することが重要 → Slimming、Sustainability…

4. 2024年度も沼津合宿を開催しました

4. 2024年度も沼津合宿を開催しました

合宿の概要

● 日時・場所

日時：9月20日（金）13:00
～ 21日（土）12:00
場所：沼津・プラザヴェルデ



● 合宿の目的・実施要領

事前に選定したテーマ毎に複数チームに分かれてディスカッションを行う。各社の施策事例や参加者の経験を積極的に共有しながら進めることで、各々が抱える課題・問題の本質を明確にし、解決に繋がる気付きを得る。

【我々が大切にしたいこと】

- 成果物作成を目的にせず、より多くの時間をディスカッションに充てる。
- 全員が活発に意見交換を実施し、より多くの気付き、知見を得る。
- 合宿という非日常の空間・時間を利用し、更なる交流、懇親に繋げる。

4. 2024年度も沼津合宿を開催しました

合宿のテーマ設定とグループ分け

合宿のテーマは事前アンケートにより参加者の希望を確認の上、各テーマごとに以下構成、人数配置でグループ分けを実施した。

<合宿のテーマ>

1. QCDS 2. プロジェクトマネジメント 3. 心理的安全性

A チーム. QCDS①

6名グループ

B チーム. QCDS②

7名グループ

C チーム. プロジェクトマネジメント

7名グループ

D チーム. 心理的安全性

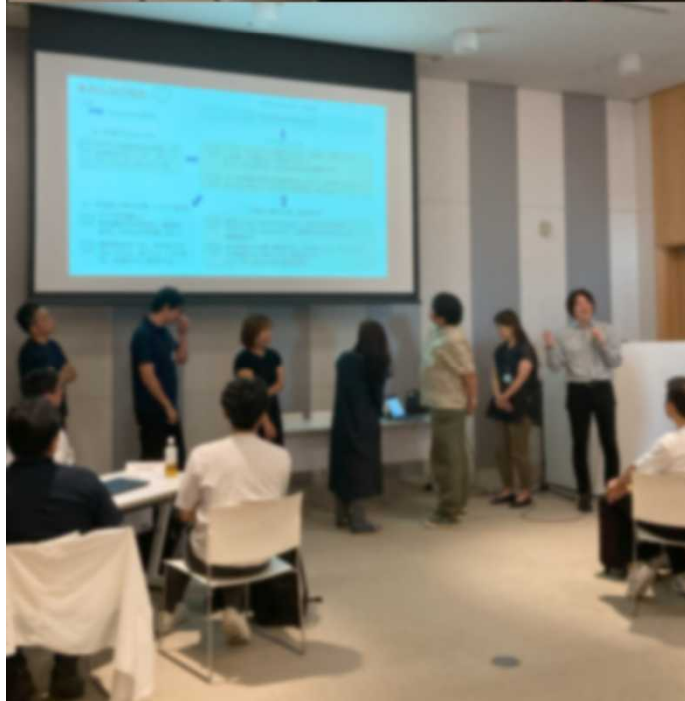
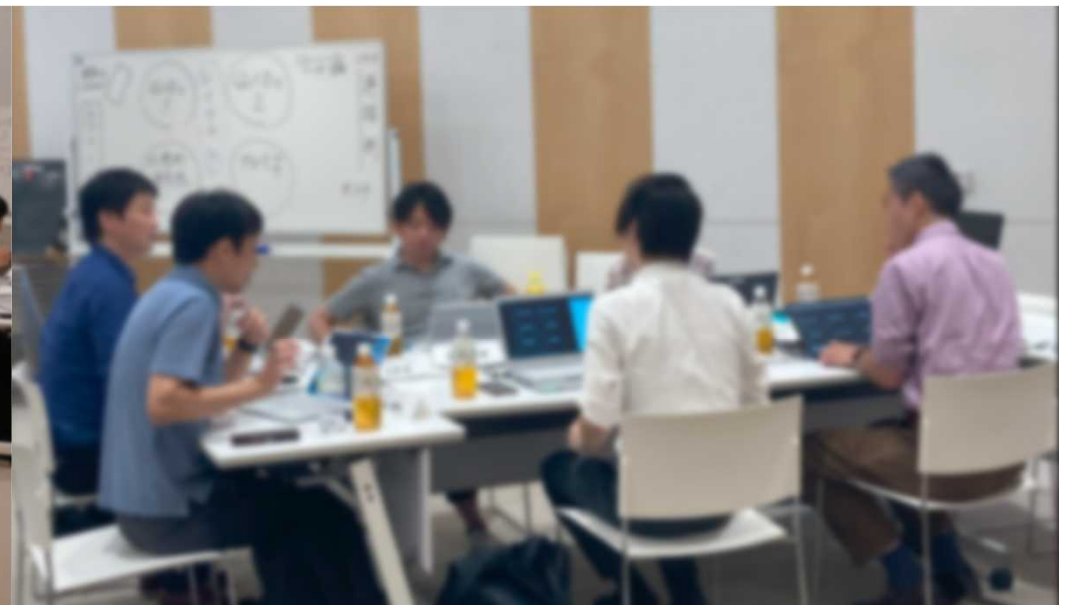
6名グループ

4. 2024年度も沼津合宿を開催しました タイムスケジュール

| Start | End | |
|------------------|-------|----------------------------------|
| 9月20日 (金) | | |
| 13:00 | 13:05 | 合宿の大まかな流れの説明 |
| 13:05 | 15:00 | ディスカッション① |
| 15:00 | 15:30 | 中間発表 (1チーム5分×4チーム) |
| 15:30 | 17:30 | ディスカッション② |
| 17:30 | 18:00 | ホテルに荷物を移動 ⇒ 懇親会会場への移動 |
| 18:00 | | 合同懇親会 ⇒ 二次会へ (全員参加) |
| 9月21日 (土) | | |
| 08:45 | | 討議会場解錠 |
| 09:00 | 10:30 | ディスカッション③ |
| 10:30 | 11:30 | 最終発表 (1チーム10分発表、質疑応答5分 ×4チーム) |
| 11:30 | 12:00 | お片付け・解散 |



4. 2024年度も沼津合宿を開催しました 合宿の様子



4. 2024年度も沼津合宿を開催しました 合宿の成果物 (抜粋)

2-4. "S"

| | |
|-------------|--|
| Service | ✓ 有識者を育てるための教育を行い、提供しているサービスの品質を向上させることが重要 |
| Speed | ✓ スピーディな進捗管理が重要 |
| Scope | ✓ 委託先企業とスコープの認識を一致させることが重要 ✓ スコープ確定時に必要に応じてマネジメント層を巻き込むことが重要 |
| Spirit | ✓ 委託先・再委託先のモチベーションの確保や確認が重要 |
| Success | ✓ QCDがコントロールされたプロジェクトの推進 = 成功 |
| Sustainable | ✓ 企画・計画段階で構想したコンセプトなどの目的を明文化し、イレギュラーな対応を迫られた際の着地点を極力ぶらさないようコントロールすることが重要 ✓ ユーザ側の要員がある程度の業務知識とシステムの知識を持ち合わせていることが重要 ✓ 有識者（ご意見番的存在）の確保 |

◆感想

- ・自分だけ悩んでいると思っていたけど、みんなに「わかるわかる」と言ってもらえて、共感(Sympathy)してもらえてうれしかった
- ・話すことで課題が整理され、すっきり(Shapely)した
- ・いろいろな立場の人からの意見をもらえて、視野(Standpoint)が広がり、気づきが多い
- ・悩みからやってみようと思っ背中(Senaka)を押してもらえ、思うポジティブな気持ちになった

QCD



5. Scopeの改善についての提言

プロジェクトを失敗させないために…

QCDsのS

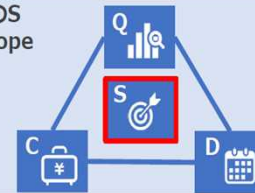
① Success



プロジェクト成功した状態を関係者(Stakeholder)で合意

QCDsのS

② Scope



QCDの大前提となるスコープ

- ・ビジネス目線
- ・システム目線
- ⇒ 必ずズレが生まれるので…



スコープのズレを無くすためには

- ・業務側と開発側での情報共有・認識統一
- ・業務側からはコミュニケーションの土台として心理的安全な関係作り
- ・開発側からはドキュメント化しない部分も都度都度確認する

QCDsのS

④ Safety



3-2.みんなにとっての's'とは (QCDs)

| 氏名 | 私の's' |
|------|-------------------------|
| みのっち | SENNBERO (せんべろ) |
| とよっち | Strength Finder |
| みひ | SCOPE |
| すぎしー | SHIRU (知る) |
| なかっち | SUNAO (素直)、SYOJIKI (正直) |
| がしやま | Strategy |

合宿の感想 (抜粋)

- ✓ 事前に合宿のチームで事例発表について話をしただけでなく、合宿のテーマについて リアルの場で検討したり、オンラインで宿題をやったりしたことで、検討テーマについて、いままでよりも、じっくりと向き合うことができ、持ち帰るものが、従来以上に大きかった感じがあります。
- ✓ 色々な会社、立場の人たちと一つのテーマでディスカッションができて、有意義でした。同じ悩みを抱えていたり、また、解決策の案も考えていたこともあったりと、普段の悩みや試行錯誤も方向は間違っていないんだと安心することもできました。
- ✓ 各チームでさらに深掘りする機会ともあると良いなと思いました。また、各チームの結論が似ている点があったと考えています。開発者達による成功のための条件と経営層のスケジュールや予算などとの確執です。その確執の埋め方が次の課題だと思うので、そこについても話し合えたらと思っています。

5. 2024年度 活動まとめ

5. 2024年度 活動まとめ

1. 2024年度 活動開始時に設定した指標
 1. 幹事団の「ありたい姿」「行動指針」「役割(ミッション)」
 2. 研究会全体としての方向性
2. 2024年度末での達成状況
 1. 幹事団の「ありたい姿」
 2. 幹事団の「行動指針」
 3. 幹事団の「役割(ミッション)」
 4. 研究会全体としての方向性
3. 2024年度の状態を踏まえての2025年度の方角性

5. 2024年度 活動まとめ

5-1-1. 2024年度活動開始時の指標：幹事団のありたい姿と行動指針

幹事団の「ありたい姿」と「行動指針」は以下のとおりです。

【QCDs研究会・幹事団のありたい姿】

参加者全員の心理的安全性を確保し、運営の立場から寄り添い、全員が一つでも多くの学びを持ち帰ることができる状態を目指します。

【ありたい姿の実現に向けた行動指針（大切にすること）】

- ①会を支えるだけでなく 誰よりもQCDsに関する学びを得る意識を持つ。
- ②いかなる状況においても、前向きかつ建設的なマインドで行動する。
- ③お互いの立場や価値観を尊重し、忌憚の無い意見交換を推進する。

5. 2024年度 活動まとめ

5-1-1. 2024年度活動開始時の指標：幹事団の役割(ミッション)

幹事団の「役割」(ミッション) は以下のとおりです。

【幹事団の役割 (開催前・中・後の3点からのアプローチ)】

- ①**研究会の開催前**：参加企業の皆さんが安心して、よりスムーズに事例発表するためには何が必要か？を考え、行動する。
- ②**研究会の開催中**：研究会の進行や、その後の意見交換をより充実させるためには何が必要か？を考え、行動する。
- ③**研究会の終了後**：アンケート（発表者へのフィードバック）をより充実させるためには何が必要か？考え、行動する。

5. 2024年度 活動まとめ

5-1-2. 2024年度活動開始時の指標：研究会全体としての方向性

2024年度も事例発表、ディスカッションにて、
開発・保守のQCDsを中心に研究していきます。

1. 各社事例発表・共有

- ⇒ システム開発・保守における品質・コスト・工期の改善、及び生産性の向上に関する取組みについて、各社から事例発表（自社内への展開を含め、改善のための事例を共有する）

2. テーマ別ディスカッション

- ⇒ テーマ別に課題解決のアイデア検討や知見の共有に取り組む。
- ⇒ Give & Takeが前提となることをご理解ください。

5. 2024年度 活動まとめ

5-2-1. 2024年度末の達成状況：幹事団のありたい姿

2024年度
開始時の
指標

【QCDs研究会・幹事団のありたい姿】

参加者全員の心理的安全性を確保し、運営の立場から寄り添い、全員が一つでも多くの学びを持ち帰ることができる状態を目指します。

2024年度末
達成状況

- ✓ **【幹事団】 心理的安全性を意識しながら、後述の幹事団としての行動指針と役割に沿って運営することができた。**
また、メンバーのニックネームを共有してもらい、**ニックネームで呼ぶことで打ち解けた雰囲気醸成**に努めた。
- ✓ **【アンケート】 緊張しながら参加したが、ざっくばらんに質疑できる雰囲気で討議しやすかった。**

5. 2024年度 活動まとめ

5-2-2. 2024年度末の達成状況：幹事団の行動指針

2024年度
開始時の
指標

【ありたい姿の実現に向けた行動指針（大切にすること）】

- ①会を支えるだけでなく 誰よりもQCDsに関する学びを得る意識を持つ。
- ②いかなる状況においても、前向き かつ 建設的なマインドで行動する。
- ③お互いの立場や価値観を尊重し、忌憚の無い意見交換を推進する。

2024年度末
達成状況

- ✓ 【幹事団】 幹事団メンバ自身が、率先して行動指針に則ってアクションすることを常に意識して心掛けた。
- ✓ 【アンケート】 業種や立場の異なるメンバから、普段は聞けないような話を聞けたり、相談できたりすることができて良い場だと感じた。

5. 2024年度 活動まとめ

5-2-3. 2024年度末の達成状況：幹事団の役割(ミッション)

2024年度
開始時の
指標

【幹事団の役割（開催前・中・後の3点からのアプローチ）】

- ①**研究会の開催前**：参加企業の皆さんが安心して、よりスムーズに事例発表するためには何が必要か？を考え、行動する。
- ②**研究会の開催中**：研究会の進行や、その後の意見交換をより充実させるためには何が必要か？を考え、行動する。
- ③**研究会の終了後**：アンケート（発表者へのフィードバック）をより充実させるためには何が必要か？考え、行動する。

2024年度末
達成状況

- ✓ 【幹事団】各研究会開催前に幹事団で打合せし、研究会のスムーズな運営について事前の認識合わせを実施した。各研究会の開催中は幹事団中心にファシリテーションし、各研究会後のアンケートは必要に応じてフォローした結果、アンケート回答率100%を達成した。
- ✓ 【アンケート】心理的距離が近くリラックスして臨めた。

5. 2024年度 活動まとめ

5-2-4. 2024年度末の達成状況：研究会全体としての方向性

2024年度
開始時の
指標

1. 各社事例発表・共有
⇒ システム開発・保守における品質・コスト・工期の改善、及び生産性の向上に関する取組みについて、各社から事例発表（自社内への展開を含め、改善のための事例を共有する）
2. テーマ別ディスカッション
⇒ テーマ別に課題解決のアイデア検討や知見の共有に取り組む。
⇒ Give & Takeが前提となることをご理解ください。

2024年度末
達成状況

- ✓ 【幹事団】今年度も各社から多岐にわたる事例を共有していただきました。皆さまありがとうございました。
- ✓ 【アンケート】 **他社事例を共有いただく機会は貴重で、毎回興味深く拝聴しました。ディスカッションの時間で発表になかった背景を補足伺えるのも貴重な経験**でした。

5. 2024年度 活動まとめ

5-3. 2024年度の状況を踏まえての2025年度の方角性

2024年度

- ✓ 2024年度の研究会全体の総合的な満足度のアンケートの結果は、満足：85%
概ね満足：15%
だったため、**幹事団としても十分満足できる結果**であった。
- ✓ 一方でディスカッション時のファシリテーション等の改善点も出てきている状況となっている。



2025年度

- ✓ 2024年度の良かった点はそのままに、改善点は改善し、**2025年度の活動はさらに進化**します！
- ✓ 詳細は次章にて説明します！

6. 2025年度の取り組みについて

6. 2025年度の取り組みについて

システム開発・保守QCDS研究会は、さらに進化(s)します！

- ✓ 活動ゴールを定め、年間を通して活動ゴールに向けた議論を行い、**成果物を作成する**研究会に**進化(Shinka)**します。
- ✓ **テーマに沿った各社の取り組み事例の発表**を行うことで、より効果的かつ活発な議論を進めていきます。
- ✓ 引き続き、意見交換・議論を通じメンバー間の関係性の構築、および他社事例から学ぶことを大切にします。



2025年度は、明確な活動ゴール（テーマ）を定め、年間を通してそのテーマに沿った事例発表・議論を行い、成果物を作成していきます。

2024年度 合宿に向けたテーマ

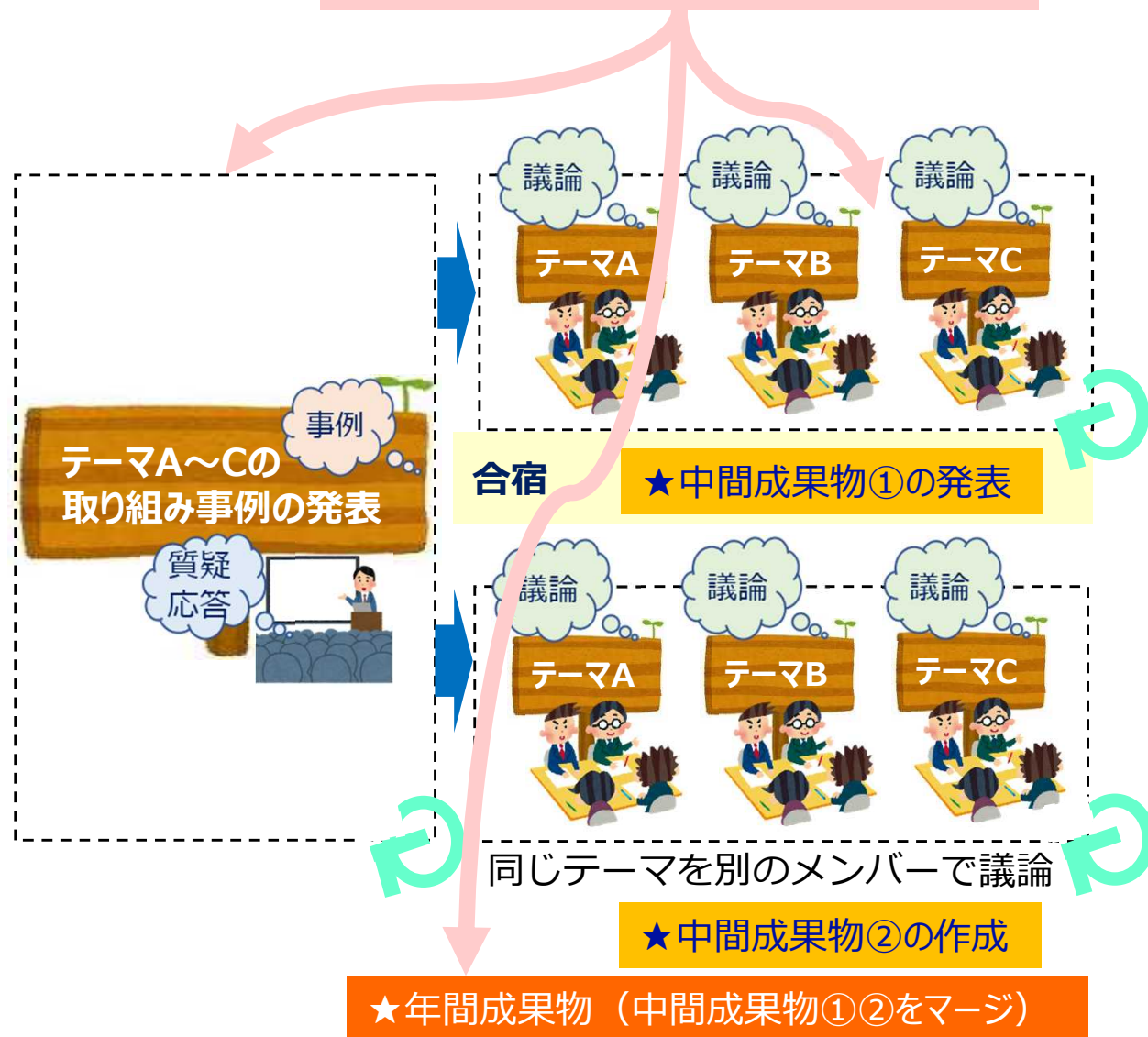


合宿 ★議論内容の発表
 明確なつながりなし



年間成果物なし

2025年度 年間活動ゴール（テーマ）



合宿 ★中間成果物①の発表

★中間成果物②の作成

★年間成果物（中間成果物①②をマージ）

2025年度の進め方（詳細）

※テーマの選定は、参加者からのアンケート回答を踏まえ決定予定です。

明確な活動ゴール

テーマA

テーマB

テーマC

各社の事例発表

+

テーマ別の議論

⇒

成果物

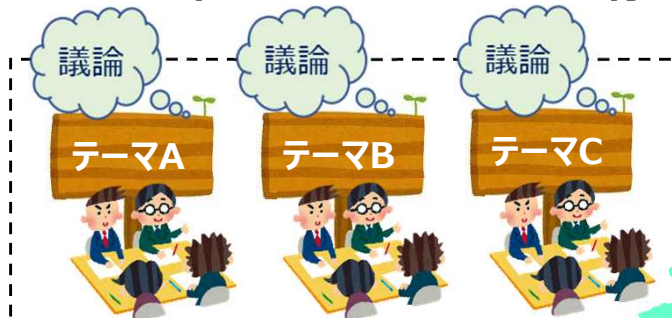
①年間を通して
年間テーマに対する
取り組み事例を発表

テーマA～Cの
取り組み事例の発表

事例

質疑
応答

①合宿までは同じメンバーで議論を行い、中間成果物①を作成する



合宿

★中間成果物①の発表

②合宿後は、メンバーをシャッフルして同じテーマについて議論を行い、中間成果物②を作成する



★中間成果物②の発表

③再度、合宿までのメンバーに戻り、中間成果物①②をマージし、年間成果物を作成する

★年間成果物（中間成果物①②をマージ）

翌年のinputへ

ご清聴いただきありがとうございました。